令和五年度入学試験問題　国　語（五十分）

二月二日　実施

〔注　意〕

一、試験開始の指示があるまで問題を開いてはいけません。
二、問題冊子は14ページあります。試験開始後すぐに確かめてください。
三、解答はすべて解答用紙に記入してください。
四、問題冊子の表紙及び解答用紙に受験番号（算用数字）と氏名をはっきり書いてください。
五、字数制限のある場合、句読点・カッコなどはすべて字数に数えます。
六、試験終了後、解答用紙のみ集めます。問題冊子は持ち帰ってください。
七、試験中、机の上から物を落としたり、気分が悪くなったり、何か用ができた時は、手をあげて監督の先生に知らせてください。

受験番号

氏　名

東京女学館中学校

一　次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

①「あーあア」

早春の陽射しが白い革張りのソファに映っている。半円形に張り出した形で作られた居間の中で、ソファの上に一六七センチの細長い体躯を投げ出すと、下から見あげる部屋の感じはいつもとは少し違って見える。大きく溜息をついた珠美は、ソファの上で仰向けに寝ころがったまま膝を立てて脚を組んだ。

広い居間のむこう側、大きなテレビの前で、姉の直美は正座したまま上半身だけ前方に折り曲げた格好で、さっきから熱心に新聞を読んでいる。

「あーあア」

珠美がもう一度溜息をつくと、ソファのかげで姉の身体がぴくりと動いた。直美は猫のあくびのような姿勢のままで、顔だけこちらに向けてぶつりと言った。

「何があーあア、よ」

「べえつにイ」

珠美は顔をそむけるようにして、再び窓の外を見つめた。

半円形の居間の壁面いっぱいをガラス窓にしたのは母である。この家が建ったのはもう六、七年前、珠美はまだ小学生だったが、それでも建築屋や設計士との打ち合わせ、出来あがってきた図面にさまざまな注文をつけて変更をさせたりしたのはすべて母であったことは覚えている。

半円形の窓に沿わせて置いてある白い革のソファは西ドイツ製とかで、日本には十組くらいしかないのだという。これも麻布の店で母が見つけてきた。

②あのころ珠美は、子どもの自分ですらワクワクするような家をつくるという計画に、どうして父が参加しないのか不思議でならなかった。母が父にそうさせないというのではなかった。子どもの目から見ても、父は自分からそれを放棄していた。

けれど高校の卒業式を明日にひかえた今は、珠美にもあのころの父の気持ちが判る。この家は、［a］母が建てた、母の家

なのである。

幼いころから自分の家はどうもよその家とは違うようだ、くらいの認識はあった。朝早く仕事に出かけていく母と、娘たちのために食事を作り、洗濯をし、掃除をする父。父は売れないイラストレーターだった。

それでも珠美たちがまだ小さかったころは、父もわずかずつではあるが仕事をしていた。それはとても一家四人を支えられるほどの収入にはならなかったが、しかし父が絵を描いているとき、母はどことなく嬉しそうだった。

珠美たちが成長するにつれて、母の仕事は飛躍的に成功し、自分の事務所を持つまでになった。家も建った。そうして父は、だんだんに仕事をしなくなった。

珠美は父が好きだった。背の高いところだけは母に似たが、性格的には父に似ているように思う。父の③あっけらかんとしたところ、悪びれないところが大好きだった。

世間的に見れば、父はどうしようもない男なのだろうと思う。髪結の亭主――もっと言うなら父はヒモであった。(注1)

けれど父には、どんな悪いことをされても「ごめんね、ごめんね」と片手拝みの笑顔で言われると、「しょうがないなあ」と許してあげたくなるような、そんな魅力があった。

姉の直美は珠美とは逆に、痩せっぽちで身体の小さなところだけを父から受け継いだようである。身長は一五二センチで止まったまま脳味噌だけ一途な発育を遂げ、去年大学院を出て今は研究員として母校に勤めている。姉は恐らく、嫌っていたとまでは言わないまでも、父を苦々しい思いで見ていたのではないかと珠美は思う。父が何か問題を起こしたとき――たとえば酔っぱらい運転でトラ箱に入ったりしたとき――家族の対応は三人三様だった。④まったく冷静に振る舞う［A］、ただただ心配してうろたえる［B］、そして怒りまくる［C］。――まったくもう、利之サンは。直美はそんなふうに、父を名前で呼んだ。(注2)

その父が、二週間前にいなくなった。置き手紙などという陳腐なものを残して、突然家出をしてしまった。これを思うとさすがの珠美も腹立たしくなるのだが、女のひとと一緒だったらしい。

父がいなくなっても、家の中には何の変化も起きなかった。母は相変わらず仕事に忙しいし、直美は本を読んでいるか机にかじりついているかのどちらかである。学校はとっくに休みになっている珠美はというと、卒業式に備えてクリーニングに出しておいた制服が戻ってくるとあとはもうすることもなく、毎日毎日テレビを観たり雑誌をめくったりしていた。

姉の直美はそんな珠美をときどき叱りつける。
「あんた卒業したらどうするつもりなの」
「別に……。短大はエスカレーターだし」
「あんたね、目標ってものはないの」
「……ない」
すると直美は苛々した調子でまくしたてる。目標がないということは人間を駄目にする。どんなことでもいいから目標を持ちなさい。
姉は一度、語学関係の専門学校や留学コースのパンフレットをどっさり家に持ち帰ったことがあった。ずっと以前に、珠美がぼんやりと「あたし同時通訳っていうのになりたいなあ……」と呟いたのを覚えていたらしい。それはただ単に、そのときちょうどテレビに出ていた同時通訳の女性がキレイでカッコよかったから、というだけのことだったのだが。
しかし直美は言う。
「キッカケはどんなことでもいいんです。あんな花嫁学校に毛の生えたような短大に行くくらいなら、何年間か外国で暮らしてみなさい」
珠美は心の中で「⑤耳に［X］ができてその上にまた［X］ができた……」と呟きながら、不機嫌な顔で自分の部屋に引きあげる。自分の進路のことなどよりも、父がいなくなったというのにどうして母も姉もあんなに平然としているんだろうと考える。
父の失踪に関しては、珠美には特別に腹立ちをおぼえるひとつの理由があった。
父は年が明けてまもなく、スーツを新調したのである。光沢のあるグリーンの生地は、成金趣味とも言えるようなものであったが、いかにも父らしいと思って珠美はなんとなく愉快だった。父自身もまた、そのスーツを［b］気に入っていて、にこにこしながら「いつ着ようか」と言っていた。
母や姉はそんな父を呆れ顔で見ていたが、父は子どものようにはしゃいでいて、なんだか可愛かった。だから珠美は言ったのだ。

――パパ、それあたしの卒業式のときに着て来てよ。
父は一瞬、驚いた顔で珠美を見て、そして言った。
――いいの？
――え？
――いいの？　こんな派手なので行っても……。
珠美が笑って頷くと、父も嬉しそうな顔になって言ったのである。
――じゃあ、そうしようか。
それなのに父は、珠美の卒業式を待たずに「家出」してしまった。せっかく新調したスーツも持たずに。それは珠美に対する裏切りのように思える。家出は仕方がないこととしても、⑥二週間くらい待ってくれても良いではないかという気がする。所詮、父にとってはこの家も珠美も、大したものではなかったのかもしれない。そう考えるとひどく淋しい。
翌朝起きて階下へ降りていく途中、ふと、父が帰ってきているのではないかという気がした。いつもの笑顔で「ごめんね、ごめんね」と言いながら、食卓についているのではないか。そして父は言うのだ。
――卒業式、今日だったよね。
しかしダイニングに入ったとたん、⑦その空想ははかなく消えた。コートを着て出かける用意をした母が立ったままでコーヒーを飲んでおり、まだガウンを着ている直美はテーブルに新聞を広げていた。
「ごめん珠美、今日行けそうもないの」
母が出かけ際に［ c ］言った。
「うん、いいよ別に」
小学校も中学校も、卒業式に母は来られなかった。その母の多忙のおかげで珠美たちは生活が出来るのだから、文句を言える筋合いではない。
卒業式は［ d ］終わった。何人かの同級生は泣いていたが、クラスのほぼ全員は持ちあがりの短大に進むわけで別れを惜しむということもない。珠美は白けていた。

講堂から退場するとき、父兄席の脇の通路を並んで歩きながら、ぼんやりと周囲を見渡した珠美は、ハッと息を呑んだ。

ダークグレーや黒い色が大半を占める父兄席の中に、ひときわ目立つ明るいグリーンを見つけたのだ。

――やっぱり来てくれたんだ。

笑顔をつくりかけてそちらの方をよく見たとき、⑧珠美はもういちど驚いた。

グリーンのスーツを着ているのは父ではなかった。だぶだぶの上着の袖をまくり、ズボンの裾も折り曲げてそのスーツを着ている人は直美だった。

金ぶちの眼鏡をかけ、仏頂面とさえ言えるような表情で投げやりな拍手をしている直美の方に、珠美の視線は釘づけになった。半ば口を開いたままで退場する珠美を、直美は苦々しい表情になって見つめ、身ぶり手ぶりで「口を閉じて前を向け」と知らせた。

講堂から出ると、たまらない可笑しさがこみあげ、珠美は思わずプッと吹き出した。泣き顔のクラスメートが驚いて珠美の方を振り返った。珠美はあわてて笑いを呑みこみ、チャップリン(注3)を彷彿させるような姉の背広姿をもういちど胸に描いた。

――がんばって同時通訳になろうか……。

⑨今度心の中で呟いたことばには、数年前テレビを観ながらぼんやりと呟いた同じことばよりは重みがあるようだった。

（鷺沢　萠「卒業」より）

※出題の都合上、一部表現のしかたを変えたり、省略したりしたところがあります。

（注1）ヒモ……自分は働かずに女性を働かせて金をみつがせる男性のこと。

（注2）トラ箱……警察署内に置かれる、泥酔者を保護するための部屋の俗称。

（注3）チャップリン……イギリスの喜劇役者。

問一　――線部①「あーあア」には珠美のどのような気持ちが込められていると考えられますか。もっとも適当なものを次の中からひとつ選び、記号で答えなさい。

ア　高校卒業を目前に退屈な日々を過ごす中で、姉の直美も構ってくれず、つまらなく思う気持ち。
イ　一風変わった家族と一緒に、母が建てた母の家で過ごすことを居心地悪いと思う気持ち。
ウ　高校卒業後の進路のことで口うるさく世話を焼こうとする姉の直美に対し、腹立たしく思う気持ち。
エ　珠美の卒業式を目前に家を出て行った父と、それでも平然としている母や姉に対するやり場のない気持ち。

問二　――線部②「あのころ珠美は、子どもの自分ですらワクワクするような家をつくるという計画に、どうして父が参加しないのか不思議でならなかった」とありますが、なぜ父は参加しなかったのだと考えられますか。三十五字以内で答えなさい。

問三　文中の［a］～［d］にあてはまる言葉としてもっとも適当なものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア　つつがなく　　イ　あやうく　　ウ　えらく　　エ　まぎれもなく　　オ　あわただしく

問四　――線部③「あっけらかん」とありますが、ここでの意味としてもっとも適当なものを次の中からひとつ選び、記号で答えなさい。

ア　何事もなかったように平気でいる様子　　イ　巧妙に悪事を隠すことができる様子
ウ　何事にもやる気が起きずものぐさな様子　　エ　隠し事がなく正しくて堂々としている様子

問五　――線部④「まったく冷静に振る舞う［A］、ただただ心配してうろたえる［B］、そして怒りまくる［C］」とありますが、［A］～［C］に入る言葉の組み合わせとしてもっとも適当なものを次の中からひとつ選び、記号で答えなさい。

ア　A　母　B　直美　C　珠美　　イ　A　母　B　珠美　C　直美　　ウ　A　珠美　B　母　C　直美
エ　A　珠美　B　直美　C　珠美　　オ　A　直美　B　母　C　珠美　　カ　A　直美　B　珠美　C　母

問六　――線部⑤「耳に［X］ができてその上にまた［X］ができた……」とありますが、［X］に入る言葉をカタカナで答えなさい。

問七　――線部⑥「二週間くらい待ってくれても良いではないかという気がする」とありますが、この時の珠美の思いはどのようなものですか。「～思い」につながるように二十字以内で説明しなさい。

問八　――線部⑦「その空想」とはどのような空想のことですか。「～という空想」に続くように十字以内で答えなさい。

問九　――線部⑧「珠美はもういちど驚いた」とありますが、この表現から珠美が二度「驚いた」ことがわかります。珠美は一度目と二度目とでは、何に驚いたのですか。それぞれ二十字以内で答えなさい。

問十　――線部⑨「今度心の中で呟いたことばには、数年前テレビを観ながらぼんやりと呟いた同じことばよりは重みがあるようだった」とありますが、珠美のことばに以前より重みが出たのはなぜですか。その理由を五十字以内で説明しなさい。

問十一　姉の直美を説明したものとして、適当なものを次の中から二つ選び、記号で答えなさい。

ア　母に似ていて、低身長だが頭脳は発達している。
イ　父を苦々しく思っており、父が失踪しても平然としていた。
ウ　仕事ばかりの母と、失踪した父に嫌悪感を抱いている。
エ　失踪した父の代わりになろうと珠美をときどき叱りつける。
オ　仕事が忙しい母の代わりとして卒業式に参列しなければならないと考えている。
カ　研究員として働くなど勉強家であり、普段から新聞や本を読んでいる。

二　次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

サステイナビリティ(注1)とは、今日まで私たちの社会のなかで大事にされてきたことをまもりながら、これから新しく私たちの社会のなかで大切にされてほしいことをきちんと大切にできるような仕組みをつくり、さらにそのような考え方を次世代につなげる、という考え方のこと。

サステイナビリティをこのようにとらえ直し、再定義した上で、ではその新しい和訳を考えてみると、それは「まもる・つくる・つなげる」がよいのではないかと考えています。

ここでの「まもる」は、「守る」であり、「護る」です。これまで私たちの社会のなかで大切にされてきた物事や価値観を守り保全しながら、外から害を受けないようにかばい保護することです。これには自然環境や遺産など【　X　】ものも、それぞれの地域の風土に根ざした民俗芸能や信仰、伝統知のような【　Y　】ものも含まれます。

「つくる」は、「作る」であり「創る」です。物理的なものや仕組みを作ることであり、アイデアや価値を創ることです。これには、低炭素社会への転換を図るために必要な環境技術の開発や、我々の社会に生まれる全ての子どもたちが毎日栄養のある食事を取ることができ、質の高い教育を受けることができるようにするための仕組みというようなものも含まれます。

そして「つなげる」は、「繋げる」であり「継承（継いで承る）」です。人々がつながって「私たち」という共同的な主語を持つことであり、世代を超えたつながりを意味します。ここでのつなげるは、これまで私たちが社会としてまもってきたこと、これから世の中をより良くするために新しくつくったことを、将来世代へと手渡していくことです。

こうしてサステイナビリティを①「まもる・つくる・つなげる」こととととらえると、いずれもが日常会話のなかでも頻繁に使う動詞ですから、より社会に広く浸透しやすくなるでしょう。また、これまで「持続可能な開発」と言われてきたものについても「まもり、つくり、次世代につなげる開発」と表現してみてもよさそうです。表現としてやや長いのがネックかもしれませんが、その場合には、「持続可能性とは、まもり、つくり、つなげることだよ」というように、難しい言葉をその意味を噛み砕いて子どもに教えるときのように、持続可能性の副題として使ってみるとよいと思います。

A、サステイナビリティの定義を「将来世代にまもり、つくり、つなげていきたいことを考え行動していくこと」とすると、次に考える必要があるのは、どのような主語でこれを語っていくのかということになります。サステイナビリティについて、ひとつの統一された主語で語るということには、実は大きな難しさがあります。それは「何をサステイナブルにするのか（何をまもり、つくり、つなげていくのか）」ということについて答えるときの主語を、一個人の「私」にしてしまうと、②私が考えるサステイナビリティと他人（他の「私」）が考えるサステイナビリティが、頻繁に衝突を起こしてしまうからです。将来世代にわたってまもり、つくり、つなげていきたいと考える事柄について、私たちが全会一致で合意できたならば、その実現のために必要な行動もきっとスムースに進めていけるのでしょう。B、実社会においてはそのような合意が取れるということは非常に稀なことです。

二〇一八年八月、スウェーデンの一〇代の環境活動家であるグレタ・トゥーンベリさんがはじめた気候変動のための学校ストライキと、それに続く大人世代に適切な行動を要求するデモが大変話題になりました。彼女の行動に賛同し実際に自分たちでもデモを組織したり参加したりした若者が世界中にいた一方で、必ずしも全ての国のリーダーたちがそうした先進国の若者を中心とした気候変動に対する社会運動に対して好意的な受け取り方をしたわけではありませんでした。既に産業化を果たし、経済面でも教育や医療福祉の面でも豊かになった国々の若者が発したメッセージには、意図せずに、今まさに彼らの国のように豊かになることを目指している開発途上国に対して、これまでに様々な環境負荷を生じさせた上で豊かになった国々が、これ以上の資源利用や炭素排出をしないように要求するような側面があり、③そのことが強い反発を生みました。このように、気候変動という全人類に共通の課題についてさえ、私たちはその対策に求められる国際的な合意にたどり着くために、長い年月にわたるタフな交渉を繰り返してきているのです。

気候変動のように世界的に重要とされる課題についても、それぞれの立場からの異なる正義の押し付け合いが生じるのであれば、やはりそうした対話のなかでどのような表現を用いるのかについて深慮する必要があります。

例えば、SDGs(注2)がメディアで取り上げられる際に④「自分事」という表現が(注3)頻出します。SDGsはどこか遠くの国の知らない誰かの話なのではなく、自分たちの国や地域で今まさに起きている諸問題を解決していくために必要なものであり、個々人がSDGsを自分事として行動していく必要がある、そうした責任が私たち一人ひとりにはあるのだ、と語りかけてきます。読者

の皆さんはこうした個人の行動を喚起するメッセージに対してどのような印象を持たれているでしょうか。

私は「自分事」のように個人の行動と責任を強調する表現は、効果的な場面とそうでない場面があると思います。ＳＤＧｓや社会課題などについて「自分事として行動を」と言われると、自分がどう関われるのかを考えるきっかけになる反面、今までそのことについて特に詳しく知ろうとも何か行動しようともしていなかったことについて少し責められたような気がして、多少の居心地の悪さを感じてしまったりもするものです。

⑤こうした側面がありつつも、個人の行動や責任を強調するメッセージは今後もさらに加速していくような予兆があります。［C］、気候変動に対してグローバルな倫理観を示す「地球規模の正義」や、環境を全人類で共有している資源であるとする「グローバルな公共財」というような考え方が国際学会などで頻繁に登場するようになってきています。こうした「地球」や「グローバル」という全ての人々を含んだ主語を用いて一人ひとりの行動を促そうとする語りは、あるひとつの考え方を示すことで、それとは異なる意見を説得するようなコミュニケーションになっています。私は⑥こうした論調が出てくる要因は「【　Ｚ　】」を主たる単位として議論が組み立てられているからだと見ています。こうした語りが必ずしも全ての社会に馴染むわけではないでしょうから、より集団的な意識の強い社会に向けては、異なる主語を用意する必要があるでしょう。私は、その主語こそが本書のタイトルにもある「私たち」だと考えています。

（中略）

まず「私たち」という主語は最初から複数の境界を含んでいるということです。「私たち」と発するときに、それはそのときそのときの文脈によって異なる範囲の人々を示しており、その範囲の人たちが共有している価値観を参照しています。例えば、家族のことを指して「私たちは（私たち家族は）」と言うこともあれば、住んでいる町のことを指して「私たちは（私たちこの町の人間は）」と言っていることもあるでしょう。［D］、「私たち」は多元的に世界をとらえるために私たちがほぼ無意識のうちに日々使っている共同的な主語なのです。別の言い方をすれば、「私たち」という主語は、⑦複数の異なる価値観を持った集団を併存させています。

こうした特徴を持った「私たち」という主語でサステイナビリティを考えるということは、その時点で複数のサステイナビリティがあることを受け入れ、それらのあり方を考えるということになり、「何をまもり、つくり、つなげていくのか」というサ

ステイナビリティの中心的な問いに対して、無理なく、複数の異なる回答を持つことにつながっていきます。

（工藤尚悟『私たちのサステイナビリティ』より）

※ 出題の都合上、一部表現のしかたを変えたり、省略したりしたところがあります。

（注１）サステイナビリティ……一般的に「持続可能性」と訳されている。長期的に続けていくことが可能な状態。
（注２）ＳＤＧｓ……「持続可能な開発目標」。二〇一五年の国連で採択され、十七の大きな目標がある。
（注３）頻出……繰り返しよく出てくること。

問一　文中の【　Ｘ　】・【　Ｙ　】にあてはまる語の組み合わせとしてもっとも適当なものを次の中からひとつ選び、記号で答えなさい。

ア　Ｘ　有形の　　Ｙ　無形の　　イ　Ｘ　共有の　　Ｙ　私有の
ウ　Ｘ　固定的な　Ｙ　流動的な　　エ　Ｘ　科学的な　Ｙ　芸術的な

問二　文中の［Ａ］～［Ｄ］にあてはまる語を、次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア　つまり　　イ　例えば　　ウ　したがって　　エ　しかし　　オ　さて

問三　――線部①「『まもる・つくる・つなげる』こと」とありますが、次のａ～ｄはどの内容にあたりますか。「まもる」はア、「つくる」はイ、「つなげる」はウの記号で答えなさい。

ａ　生ゴミを利用して水素エネルギーを発生させること
ｂ　外来種であるブラック・バスを湖から駆除（くじょ）すること
ｃ　こどもが祖父母から戦争体験の聞き取りをすること
ｄ　海岸に流れ着いたプラスチックのごみを除去すること

問四　――線部②「私が考えるサステイナビリティと他人（他の『私』）が考えるサステイナビリティが、頻繁に衝突を起こしてしまう」とありますが、これと同様の内容を述べている部分を文中から三十字以内で抜き出して答えなさい。

問五　――線部③「そのこと」とありますが、これはどのようなことですか。六十字以内で答えなさい。

問六　――線部④「『自分事』という表現が頻出します」とありますが、「『自分事』という表現」はなぜ「頻出」するのですか。「～ため」に続く形で文中から十五字以内で抜き出して答えなさい。

問七　――線部⑤「こうした側面」とありますが、どのようなことがらを指していますか。次の中からもっとも適当なものをひとつ選び、記号で答えなさい。

ア　メディアがＳＤＧｓを語る上で、「自分事」という言葉が欠かせなくなっているということ。
イ　「自分事」という考え方は、自分たちの国や地域の問題の解決にはそれほど必要ないということ。
ウ　「自分事」ということを強調するメッセージは、効果的ではない場面もあるということ。
エ　社会の問題を「自分事」として考えてこなかった人は、自分の責任を理解していないということ。

問八　――線部⑥「こうした論調」とありますが、これはどのようなものですか。次の中からもっとも適当なものをひとつ選び、記号で答えなさい。

ア　人類が共有している資源を公平に分配するために、納得するまで話し合うという態度。
イ　全ての人に関わる問題について一つの考え方に従って行動するよう促すような態度。
ウ　国際学会でよく見られるような相手を説得する巧妙なコミュニケーションを取る態度。
エ　「地球」や「グローバル」という語句を用いて問題の重大さを強調しようとする態度。

問九　文中の【　Z　】にあてはまる漢字二字の語を文中から抜き出して答えなさい。

問十　――線部⑦「複数の異なる価値観を持った集団」とありますが、これにあたるものを二つ文中からそのまま抜き出して答えなさい。

三　次の短文中の――線部のカタカナを漢字に直しなさい。

1　サッコンは景気が悪い。

2　運動会がカイマクした。

3　ムニの親友となる。

4　バンシュウの夜の静けさ。

5　自分のシンジョウを曲げない。

6　この商品は売りきれることがヒッシだ。

7　古い家の床板がソる。

8　ツウカイな小説を読む。

9　コガイを元気に走りまわる。

10　時代のチョウリュウに乗る。

国

令和五年度入学試験　二月二日　実施

国語解答用紙

（字数制限のある場合、句読点・カッコなどはすべて字数に数えます。）

東京女学館中学校

一
問一
問二
問三
a
b
c
d
問四
問五
問六
問七
問八
という空想
思い
問九
一度目
二度目
問十
問十一
二
問一
問二
A
B
C
D
問三
a
b
c
d
ため
問四
問五
問六
問七
問八
問九
問十
三

9	5	1
10	6	2
	7	3
	る	
	8	4

評　点

受験番号

氏名

国